

旧地字處物誌

保子山空地御境内 西松倉 鞍掛石 胎及胎岩 妻丈石 御池

菰谷地 鍛冶坂 衣掛松 御中洗池 中ノ

四ツの泉あり二々泉横長ありて巨り三四間二ツを泉形

田にして八斗 板橋とふあり 三表 他領 地領 柳ノ河

東 若狭 登方 清水 油壺 コホシ 柵実長嶺 南 鍋

倉 清水 牛廐 鱒河 乳表 土を一本木 他領 境

是より東訪道なり南北左右にかつ 高杉 椿臺

祝河柳むか正月四日より雪吹くはげしくあか

行末も了れ吹くはげしくなる大柳の下まで祝河して

めめひ飯りしりと読り傳ふ且柳むか月に枯して名のみを

今このころより大銀杏一とありて
惣物諸の常
吹柳といふこ 後ヶ池 八池本池 袖山といふ
名に袖山平外山之神の御りなりと本に外之今近き
なる外山反といふ在処までも知るし 前田池といふあり
る名ともとも田といふなる前田といふありて 後平池 熊
の池といふ 熊のふりありて 熊野社といふよりなる名
あり 熊の池 若水池といふありて 人のその銘に在りて
ての始より水といふび 泉のありたりや 又向野
熊野堂池 大造寺寺跡といふ 八池 旧名多き
かあり 杉林切杉ありて 此よりより水虎といふ
かありといふよりいふありや 蟬池 旧名前きといふ

そり

石畑

うきり杉の仙北郡外山境に
書後これ此より記すなり

黒巻沢

鏡池

いふありてその雨れ井堰をいふ水うち溢れける事をいふこと
いふ埋る意にもとも 鏡のうといふん 鏡見池 鏡見池

いふこと 秋田郡久保田より 仙北郡よりありといふなるより名に
や蝦夷語となん池といふやみ池といふや池といふや池といふや

さきの意なるし 支天山といふに 摩利支天を祭る山
こ あり杉の池 文杉の池といふ俗なる 雲文の事より

衣の文といふ事多し 此池のさきよりなるや 舟
越し 男鹿の雄渚の池は同名あり 舟木など伐り出

るかやわよりより大河ありて 処ともおもわれを 新坂
ハつと池 まがたきと池 甘池の池をいふ雨池といふ

雨水と湛ふるよりいふ名を 切通しつこふも少し名を朝
夷奈が切通し、鍾舎を在りて人能く知り、経塚や寺
し塚物諸つづらふとてつ 少城戸大坂の裡路
あるよりいふ 牛尾菜平 西平 祝作
馬場 鳥越 といふ多き名とていふと此よりいふ古
道とていふ一保の鳥居ありし処とていふ 柳多根
柳多根 柳多山 柳多岩 といふ多き名と 柳多山
琵琶流し 琵琶石といふあり 琵琶形石といふありの
説とれと古通よりいふ琵琶法師がその石より琵琶をい
いといふ坑場の跡ありむかひ掘りいふむ 柳多根
長根 大根 赤平峠 茨作 赤平阿仁のいふと曰

各ありとていふよりいふ石 碎るなる赤平といふとていふ
いふ掘り場の内 霞谷地 河路 赤作
おな作 ざん作 火燧石 赤作 といふとていふと形あ
る岩ありとていふ 柴倉 根作 うね山 敷ありとていふと
いふ 大石作 大石作 煙作 石倉 新田
河 堤あり作 といふ作 河 廻りの作 堤ありとていふ
松首山 長坂山 白坂 すすみ作 寺作 寺作 寺作
寺作 枯し木あり作 大石 穴作 土加美作 田作
蒲作 葛あり作 妻夫石 仁王堂作 南
方 塚堂作 穿り木山 沢の作 蓮名作
馬場 大石 寺作 神宮作 といふとていふ 牡丹表

大長根 釜沢 八島長根 寺沢 むかしの 又城澤
 山の神杉 新下澤 杉澤 立山の澤 油澤 地
 頭澤 大鼓澤 小鼓澤 新山 向の澤
 田澤 釜ヶ澤 澤吉澤 純の駒立 棚の本
 澤 匠の澤 手取澤 くらちや澤 かつちや澤
 甘澤 大平澤 池の澤 嶋城 咽石 孫次郎
 澤 つくし 由利連八太夫殿と遠見やれり 山室の澤 日吉新場
 七ヶ基 南上澤 論田澤 高平 河童澤
 格平 石高 五ヶの澤 貝の澤 なる
 かぞえ いふはくまゝ同名とせども多し

狐の名

馬場 のさへんこ 紫摘 澤のあへんこ 杉屋元道田 1同名あり
 本本のさんこ 長助 上ヶ基のうんこ
 高は良の大ナ坊 聖申の千光坊
 石畑のさ平坊

此幸市村よさんへ長助と云ふ牝牡の狐あるよりを近きとし
 ならむその山里の人な狐魅^{ツキタ}と移託^{イタコ}神子とせ梓^{イタコ}なれば
 恐れいとしふる狐なれと今と極家なしさうやうとせ社と
 住ませよとわむかりあれその由何とや名なれと堂ハ
 さんこと祭るべとて去^イきそれよりさんこの神とせとい
 ふ是を考ふと狐の編者の神使より三狐^{サハ}事女と云ハ
 せんこととてあけせしむるやあむ谷の土清云伊勢鎮

坐記の宇賀神社神亦名専女三狐神といふなり
之三狐の御饌津神の義なりといふなり

ハ沢城跡多話

北とふ処あり北北郷と畧しふことを北郷といふなり
ゆゑを以て菅神を以て斎なりと云ふなり菅原寺
といふ禪刹に北寺より三戸雪林ありその林のありは古蹟に
してより大杉あり大杉のまゝ古堂ありその杉は葉の
衣をむき掛て俤の山々諸である此堂は隠れて明ぬ
るを以て此堂を竹籠堂といふ大杉あるそのまゝ一こも
り此下の杉具をなをちいて登りしとなもつゝおれ且を
考ふ人の隠しよりいふにけれどもと吉野山の神とを
此よりいふしよりし斎ありと云ふなり竹籠寺神社_{底竹男中竹}
{切屋匠屋を築りしより}斎ありと云ふなり勝手神社{ミシノ}水介社_{ミシノ}
_{律國住ま神社といふ}

もろこよりくろひませーがなきてにうーウツシ草まうりた
らむ下名宮其頓宮の蹟の田地となりぬさうけれいし
なかもがしの頃までそれと人をねばる雷吹の柳の本より
祝詞してあひびぬうつませよりあらめ

吉野山の大蝦カササギをといふ事ありその正月 戒王堂

そそ太なる蛙を作り其大蝦蟇の中へ人入りて此大蛙ニウ
ニウニウといふおあがるなり身重く肥満シツキさる人せうろい
おあがる事あやまことこ此事いあらゆる日記まい世に
人知れる新まき寄とてふんふの書ともよも見えてる此係
多利山の音堂の押令も裸ハダシは肌足あて左右の手をさげう
ハ草のふゆは是と芳野山の蟾カハツト余ト此の神事や草ウツシならんじ

扇平といふ処あり吉野の山には堂あり大峰登る山の新

客此堂よりして懺悔して要するなりける扇平もて己が身
を解除ぬえうして後々堂の師祝言とて新客の者は
神酒をたぐひぬ此堂は蟹目なき扇山なるはかり積
りて此堂を懺悔堂といふまゝ扇堂といふ人もあるなり
此事峰老川の扇堂の処もも詠う扇良の名いひう
ちう芳野を暮りたるいもさる堂もわちうつらん処の所
仁の川原の扇平とて処をうー坑場アキヤマのありしころさるころ
金振等が似たるをみて此より所を付する名ならんり
かつて新客ら異イグトに同音ト懺悔カンゲくは根は扇大峰オミナセ
ハ大金剛堂といふ事を唱へて登るこ

赤平山^{マシ}の丹嶂^{マシ}のやうなる處を根長根といふがねに築
の根甲斐又々峯不二うものごと長根と云峰之若野山も
一目千本といふあつてを根なるか根なるか根なるか
とおがそつて此^{マシ}のさくらながねもわかれ根のこと
とて言ひ錦うしなうなりしものかきりあり
葛ヶ原^{マシ}もとも葛蔓^{マシ}の多うりし名ならむこれをおも
奥羽^{マシ}の山賊ハ多く葛蔓^{マシ}の事を久叙^{マシ}と方言は此^{マシ}の
のみ久受^{マシ}といふと此葛ハ國^{マシ}根^{マシ}して天平宝字の世はこれ
らが後亂^{マシ}なりしも此^{マシ}のまて住つたよりいづきし地名
や倭訓^{マシ}に云くまの若野郡國根と神武天皇の時より
見えて應神天皇の時^{マシ}末^{マシ}献^{マシ}してはそなへしより諸^{マシ}官

會^{マシ}は國^{マシ}根^{マシ}奏^{マシ}とて世々絶^{マシ}に延喜式^{マシ}は献^{マシ}御^{マシ}執^{マシ}奏^{マシ}歌曲
毎^{マシ}節^{マシ}以^{マシ}て七人^{マシ}考^{マシ}定^{マシ}と見^{マシ}之^{マシ}北^{マシ}山^{マシ}抄^{マシ}は國^{マシ}ノ根^{マシ}奏^{マシ}を凡^{マシ}成
兼^{マシ}平^{マシ}記^{マシ}云^{マシ}其^{マシ}笛^{マシ}以^{マシ}指^{マシ}鹿^{マシ}孔^{マシ}とて國^{マシ}之^{マシ}曆^{マシ}も永^{マシ}仁^{マシ}軍
正月七日^{マシ}戰^{マシ}國^{マシ}根^{マシ}坊^{マシ}家^{マシ}奏^{マシ}と見^{マシ}之^{マシ}は次^{マシ}弟^{マシ}は一^{マシ}獻^{マシ}國^{マシ}根^{マシ}奏^{マシ}二
獻^{マシ}御^{マシ}御^{マシ}敕^{マシ}使^{マシ}三^{マシ}獻^{マシ}ぬ教^{マシ}坊^{マシ}別^{マシ}當^{マシ}奏^{マシ}舞^{マシ}伎^{マシ}奏^{マシ}と見^{マシ}之^{マシ}
云^{マシ}と見^{マシ}之^{マシ}云^{マシ}と

ある人の云く何ゆゑ女を保護^{マシ}利^{マシ}降^{マシ}止^{マシ}め給ひますや
社^{マシ}ま^{マシ}守^{マシ}子^{マシ}石^{マシ}までとゆふは後^{マシ}のやとて此^{マシ}の事^{マシ}の事^{マシ}なら
むと云^{マシ}地^{マシ}主^{マシ}山^{マシ}といふことも多し今^{マシ}高^{マシ}野^{マシ}山^{マシ}の不動^{マシ}坂^{マシ}は
女人^{マシ}堂^{マシ}ありまは花^{マシ}坂^{マシ}の方^{マシ}は拾^{マシ}石^{マシ}なりそは守^{マシ}子^{マシ}石^{マシ}も拾^{マシ}石^{マシ}
もわかれまは女^{マシ}の登^{マシ}りし所の事^{マシ}なり

まゝ同く神樂敷と云ふ本宮といふゆゑよりゆめくたまり
の神樂敷なりと強説なりとありしをいひ傳へて七福神
といふ七柱の神を擬する画を事と云ふその身老
と春日神の毘沙門天福祿壽の唐嶋檼取の御神として
経緯を武甕槌命之辨財天等と教科嶋姫女
少彦名命大黒天大と妻命布衣衣の鍬命といふ
ある佛事と天上の孫勒地下の布衣衣と見えたる孫勒を
布衣衣なりといふ布衣衣の鍬命鍬命の神樂の祖神
として孫勒堂と神樂殿なる事著き事こそを何
よりして恐怖も旧宮なりといふ虚言惟く言ひ始り
神をけりぐるはおかしくけむやのうかしくなり

此は城のふるき式ハ月毎は朔日より五日まで神女
家のみより六日まで齋食せりけるも古郷よりで例をひき
て所嶽精進のころよりあつむりしめをなすところこ
七とせをかりさむつとせの秋なりと雄勝郡湯田の駅宿
めを宿りせし由利郡松本多治よりしり男々飯のあつせよ
蘭煮なるを食ふに膳より下りぬきハ嫌なるくといふ
否き事なりねむる住む郷の本居の神の林式なれば
かゝいさふらぬといふところこもみづなり所神をいふ
いふて曰く所居る処ハ保志羽山の西北に中りて野牛ぬ
くふ村こそよ太々堂あり崇福さびき所神の村
まゝハ周王棟上ハ事を忌てまなはし所神こそよ太々堂といふ

かぬさるまゝやまゝ昔をうづもゆるすゝあふとこのお
れ今八重田は智なりて麴賣りとなりてそこを
せらるゝ思ひぬ菌の汁を吸てたちぐらみして昔川へ
てうらうて神のやでけもろてやこらとともぬい
そのいも川とハツこようあるそハ保多の峰よりおつる
とそより年を幾ま経しとて下ぬ大岩嶺のありし大
蛇とてあて降りぬよりこれハ其流をうけて秋田泉
といふその川を秋川といふこゝより由利と秋田と郡
あがむとき神はまをうて午王を印をうたふ此宝
印の所れ留る処を極て秋田領ならむといふの流より
たうたハなれして八重田里近く止りぬ今そこを午王の

瀬とて此午王の瀬まで村々の民此田地は佃る稲田を保
多府の神山のとき常かれハ神田といひて一粒うとし
ゆめ佛の供ふ事なく佛の米とて本庄矢嶋の領は
て買おめててせがふに佛はもろなりこまハ保木
の際齋といふ最き事におのれり祖父なるものハ保木
に生れゆきこらと守屋などてものならむいふ守屋ハ
いふ古き家に虫干のころ見しは書物にも多し保木
の村端茅のときより里長の家にころから其れ地の
書物にも多しハ保木かて流の万ふとふもの
里長の役をつくの天正の末なりむ今の中々村の角か
うはとめてそこを里長村といふ後は遠く保氏の雅

や中社家となり笛の役まで御神樂つとあられしが今ハ
身もたち神ぬしとなりて大友氏と伊豆をあらせら
る人の世れがれはのちるものといふは諸れなりおの
り方にも古事とも多かりしか多くは流れたなりし
はむかひなりしものなりしは記しおきたるをいふ今
より記ぬ今大友氏の古記とをを見れば一乗進元
年矢嶋領法内太室坊と豊田領羽鷹村和泉守と保
呂波山と牛王れ出へ儀片に戸表祈出へに台に戸
寺社御奉行所より拙宅に法書と以て左の通なり
八月十日御祭日なり曰昔より九月朔りと此御
より八尾木御中法廻之時役人之事なり御正勝犬

大友摩守御守り中事

笛之役

守屋伊豆

仕り中事

鞭之役

仁王祈宣仕り

所御主願

ハ書き祈宣仕り

路御より山祈宣仕り

霜月七日大所神樂祈祈仕り

伊豆御神

樂仕り祈宣仕り恨之にを法なり

元禄初之平極月十九日

出羽國仙北保多前山別前

大友通書付抄上中事

大友志摩守下

云々云々証文とてぞある

大友氏も幸ハ大伴氏多らむもの見えたり守屋
氏も幸ハ谷氏なり古記祿子見えたり信濃之師方
に守屋あり上宮祝部なり

ちる氏の祖遠孫氏の祖と安閑天皇の御隨身など
 ありてその神を祖と保る羽山は、治世その人としてなつたか
 やちる氏親遠孫勝親と同一の孫宗とて勝親大職
 冠録と云ふ世孫藤原俊基の世に大友と遠孫
 も親の字通りたりと考つべし

神定河の近きことと云ふは古き録に云所まで
 あり是を考ふ伽藍開基記に在る保る羽山天國寺觀
 音院の跡と云ふありまゝ神定河と云神定寺あり
 たりと云仙北郡古名山手郡に府峰のより一と今も神
 宮寺なりむかひは月考ふべし

甲八澤の白坂
 東に保る羽山あり
 天壽院と云ふ本
 寺ありての時山あり
 一と云採りて給ひ
 一と云採りて給ひ



甲

神宮澤いよく此澤奥ふ
天台宗の寺ありてを此澤部ふ
遷して今ふ神宮寺
とふ是なり

乙

新城とて大友氏の
上祖あり居候の跡も
里々新城指しあり

乙

甲



守屋家

守屋氏の家^{ヤド}は八尾木の堂山の村^{サカ}にあり此家累世
家譜家系^{サカ}を著し出る代守屋肇^{ハジメ}勝^{カチ}の^ノ上^ノ祖^ノの^ノ像^ノ
ありし文通^{モンツウ}とも多し此其^{コノ}の^ノ記^キを

秋田城^{アキタ}の^ノ殿^ノ 福岡^{フクオカ}の^ノ文^ノ

代系^{ヤク}は^ノ初^{ハジメ}く^ノは^ノあ^ノや^ノら^ノ
殿^ノ板^{イタ}無^ナ六^{ロク}根^ネ河^カ親^{チカ}の^ノ者^{モノ}
は^ノき^ノ初^{ハジメ}人^{ヒト}と^ノて^ノ福^{フク}の^ノ文^ノを^ノ
新^{ニホ}金^{キン}と^ノあ^ノる^ノ文^ノを^ノ付^ツけ^ノし
て^ノは^ノき^ノ初^{ハジメ}人^{ヒト}と^ノて^ノ
同^{ドウ}と^ノは^ノき^ノ初^{ハジメ}人^{ヒト}と^ノて^ノ

五

仙九妹は 新撰佛類
其の 新編
平松海老 其
金子 目 仲
金子 事 無
又 新編 有
人 新編 有
より 有 有
あ 新編 有
す 有 有

福是抄

八月廿日

佛保子別商

慶長九年 保皇羽山御定額付由外日向并肥前勝手形

山三座、六人、和ありて

田布為
石井明前

清本

同十年
肝前大
九勤依即
黑印

八
滑木村に役木所之條

二、三、四、五、六、七、八、九、十

立

納百世不四

人仕事物を而石の年中一人を
考つて考つてあるて人仕を人仕一人
一り付を来ぬ念ひをして川念事
何島し事なる而石の一年、二千五百

之知事
に任ぜらるる
中より

三日

日代
録

以て之を別す

人
其
お

に
之
を
之
を

以て之を別す
其
お

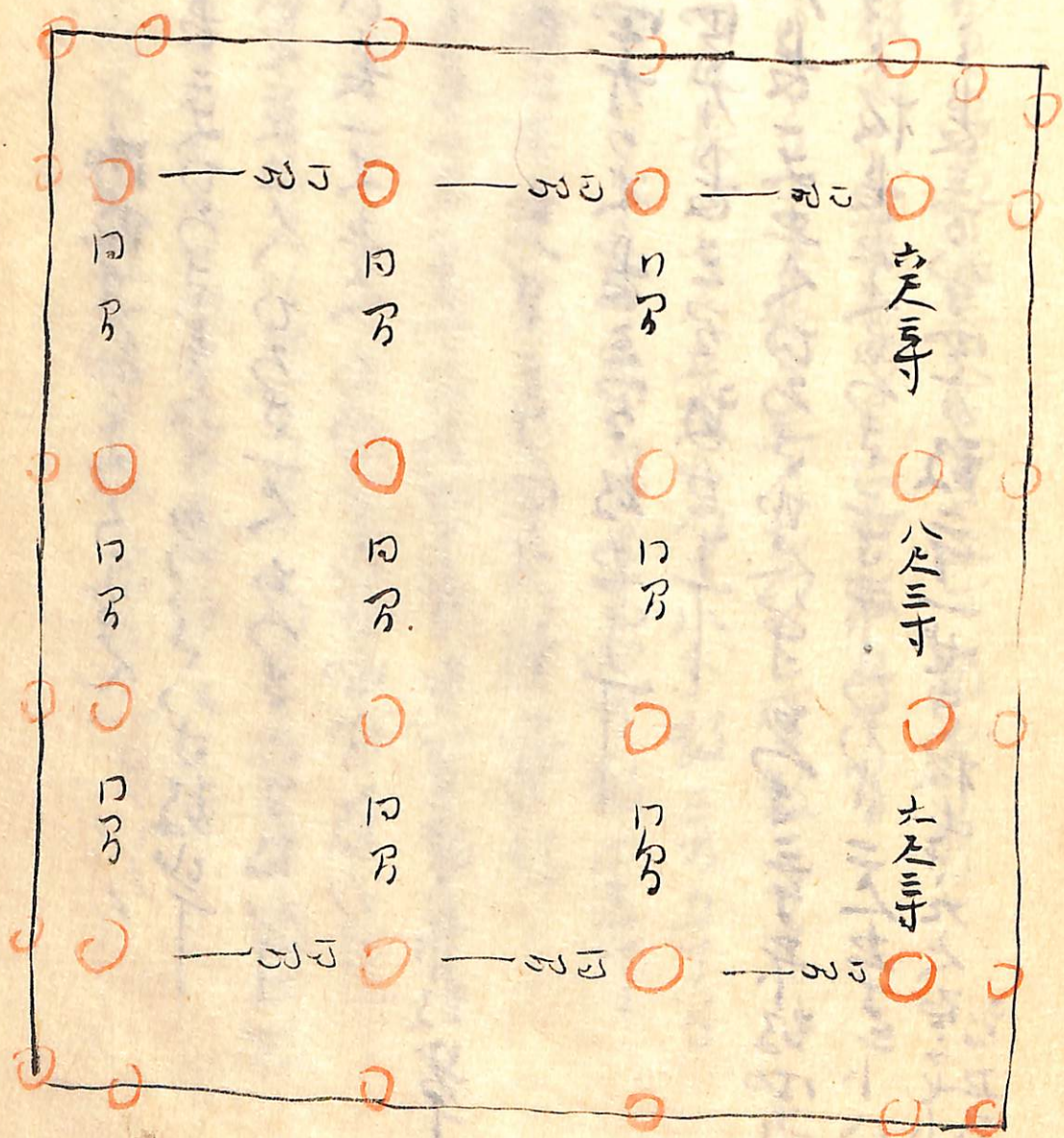
以て之を別す
其
お

以て之を別す

以て之を別す
其
お

雲長
 年保
 羽山所
 造主之
 羽山

雲長
 年保
 羽山所
 造主之
 羽山



又雲長何処に
 中々出まされ
 羽山所
 造主之
 羽山

七
 丁
 寸
 尺
 寸
 尺

又雲長何処に

一斗きこも一に板三す板一も丁ろくんのさうら
一斗中ふのめき一二丁のたさき一斗きこもさ
一ふききたけ一二丁

慶長松港年 西暦九月十九日 さいりた。

後之由ふはまも家山ななれは山なも田ありき
一二をきかうは出ななれは

知是院様は不例寺田中越中守をまじ書翰

うきもてあ
金と銀の

師心成程は初

ぬれりては年

身なりては年 麻毛

りきこも

保名おとす

いふききたけ

一斗きこも

うき

七月

田

保名

保名

保名

一斗

りきこも

いふききたけ

うき

あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま

あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま
あゝ何あま

田中張中守殿より而新橋より
書稿

事しり
るくを

此方拙者技合

又
海お這印

ふ能引

そ是給上中如

創市れ念

成中玉所

守中道兵

居右存兵

上保り新機

用の元也

主中 以保

とふ給て中由有

そ引くそや

つ居て一為守

う中へ所るふ能

白くそ海し

折日七方田中紙書

字陸取

うん

しりし物系

新し物

新し物

能ては破道

新し物

新し物

後合五送中

因落為新念

清徑為新入部

至是聖意亦平

亦由常山一別

以新為新入部

今以新為新

至是聖意亦平

亦由常山一別

以新為新入部

今以新為新

至是聖意亦平

今以新為新

至是聖意亦平

亦由常山一別

田中紙可字

今以新為新

至是聖意亦平

亦由常山一別

舊式新太輔殿
二面 己二アクル
所初係中見書係七通也

今以新為新

至是聖意亦平

亦由常山一別

以新為新入部

草一箱 保公の爲
中島と云ふお沖前、
おそれお後を後不
ても中島君と云
たしお公は所字を
おしりま久し目出方方
まらぬ事と云ふ所
を後し

武部左衛門

二月九日

不面

保公の

所別当

お公は念ふお公は念ふ
巻の事と云ふ所

能政破上小

戸村拾石史を記す
し、お公は念ふお公は念ふ
付る為所新念と
思毛、馬の所、馬
と云ふ不於お公、
所お公は念ふお公は念ふ
中、お公は念ふお公は念ふ
巻の事と云ふ所
を後し

武部左衛門

二月九日

不面

保公の所別当

寛永二十年

鑑照院様 徳雲院様御不例身 御祈禱
威徳院より書附

只任安山

方より立致 是より神馬より是

并 銀子より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

可より立致 是より神馬より是

口執子より立致 是より神馬より是

寛永二十年

別書附

威徳院

後

松之助様江戸御祭駕之節大和田六右衛門より守を
何より又之聲西人より祈禱申果書翰

一 守之助様江戸御祭

去り御祭

十 守之助様江戸御祭

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

此より立致 是より神馬より是

大和田六右衛門

伊豆子殿
 子殿子殿
 了

握原美濃守入道ヨリ書翰一通前後破々是見

後方保良明山
 乃代系信以信
 子殿子殿
 判金三兩
 細上中
 子殿子殿

握原美濃守



五月拾日

土中より掘り出されしもの多し王石
 青磁器古物甲乙互羅す

丙丁此互す四方古南京山

古瀬戸焼中已

此互す寸五分

庚寶石一ツ

大ツ大栗の

こし

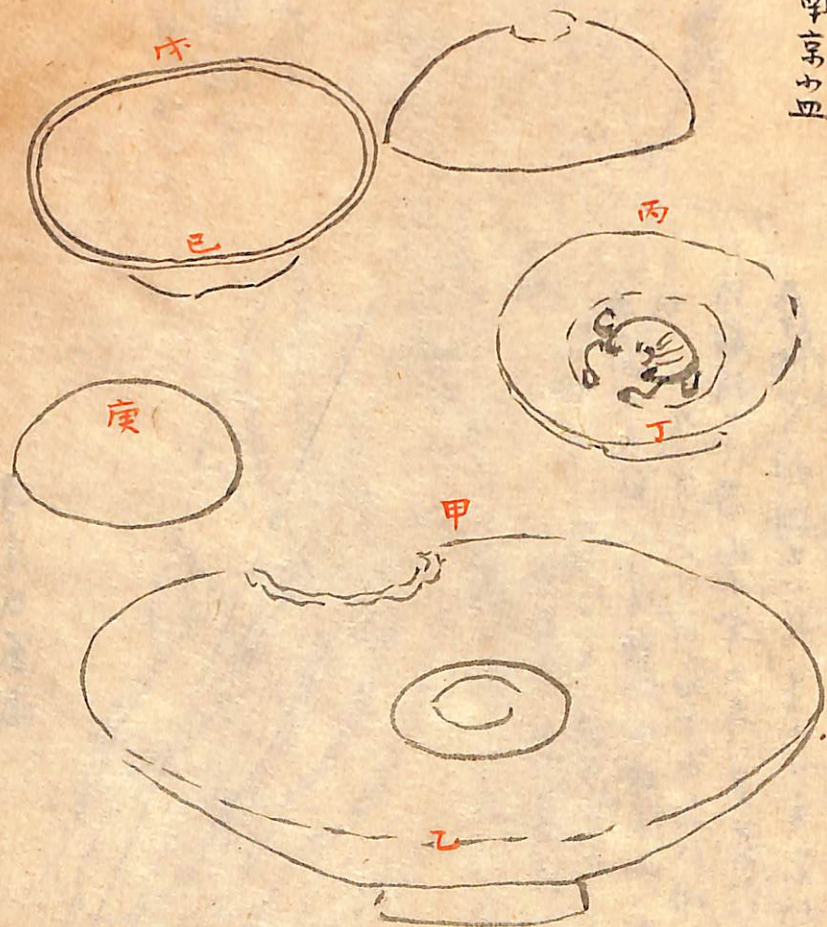
所謂

漆輕

瑪瑙

のこし

可



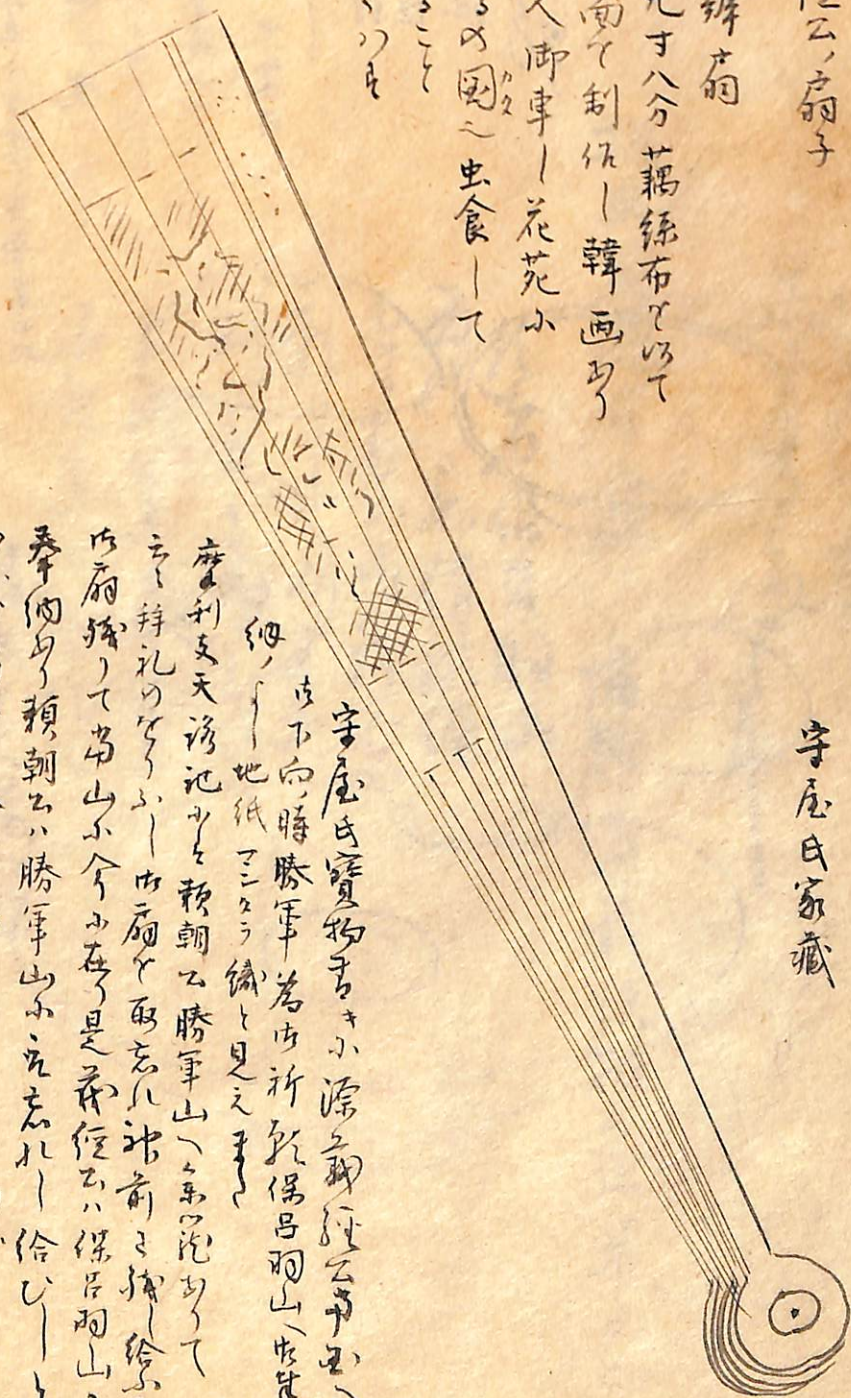
守屋家藏

新經云、扇子

此辨扇

長九寸八分、藕絲布にて、
扇面を割作し、韓画を
貴人御車に花苑小
至る、以て國之虫食して
見ふこと
ありしなり

守屋氏家藏



守屋氏寶物書云、源義經公が、
以下、向時勝軍、若市新、新保呂羽山、
細、地紙、ミタラ織と見え、
摩利支天湯記、新朝公勝軍山へ、
三、拜礼の、
内扇、
内扇、
奉細、
即、
古記、

守屋氏上祖

木像之図

守屋氏家藏



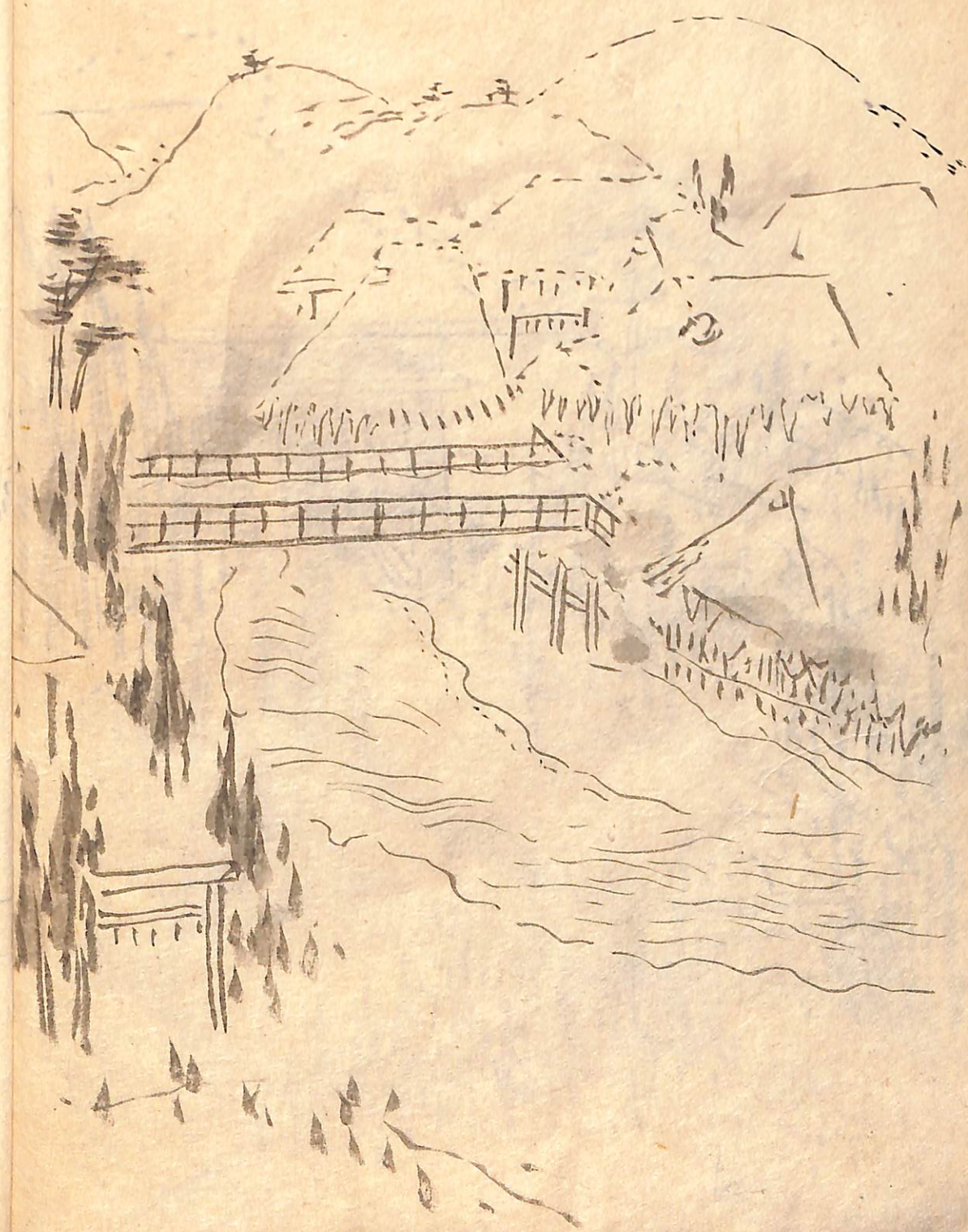
高一尺二寸
柱木少て割る

後背之形凡如圖



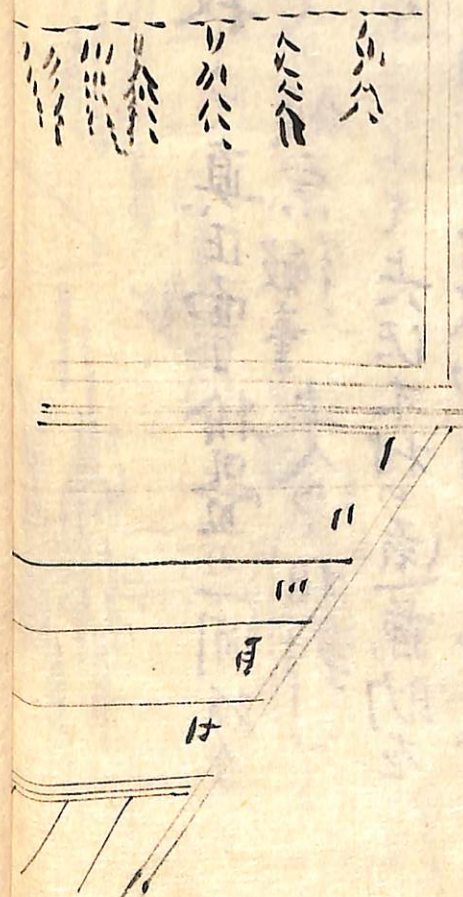


山伏
の
ひ



守屋氏の殿原坐敷として真正面より拾疊の間あり
 最なる神事の上紀十人の殿原^{殿原}坐敷^{坐敷}より相對して
 居並ぶその十人の殿原坐敷とも上込木村の遠藤助左
 工門中村の遠藤七兵衛曰遠藤教馬曰遠藤三郎
 之木村菊地八重郎 山崎村高橋少左工門 丸木^{ツナギ}
^{獨木}村の佐江佐五郎^又守屋門前村阿部新左
 工門北村の鈴木作兵衛 上込村佐々木善三郎
 之方執人なりし家三々家屋敷をうや^{ヤド}屋を留
 へたりてむかひのきあひなりむかひよりいふ山崎の
 高橋や若工門獨木の佐江佐五郎之よりいふ殿原
 といふそのより一へ芳野山より神社の神輿を供奉せ

人になりなりじろ寺家より出せりそのころハ加藤
 丁之そむく遠藤家の人よりそむく遠藤家の
 上祖藤原勝親よりつたなりし家臣がらむが今
 の十人の数原おもく、座敷をいそぐ衣^食三
 くて此数原座敷と並なふもの門前の阿戸新左
 工門山崎の直務や左所が此方人のこゝに十人の
 のちとも西人のいれむりしにけりなる



摩利支天山原本
 摹写之図

甲
 孝子ヶ瀧
 垢敷より端



乙 鳥居

丙 甲ヶ臺

丁 頼義

義家

陣所



戊 不動堂不動の滝

己 不動坂

庚 影向石



御光嶽

本社

五天堂

降伏門

弓楯松

白イナリ

カウラテン

黒イナリ

新

千洗

武則金山
頼美阿け村へ入る



